

昭和三十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和三十四年四月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第八十五号)

目

仏降誕の意義……………(1)

「御文」の発見……………花田正夫(4)

近角先生の御一生を追憶して……………福島政雄(8)

ひとへに往生極樂の道……………榊原徳草(11)

次

# 慈光

第八卷

第四號

# 佛降誕の意義

四月は花祭の月であり、仏徒はこそつて、誕生仏を中心  
に、香華を捧げ、甘露を濯ぎ、老小男女打ち揃うて、掌を  
合せ、仏前にぬかつぎ、仏徳讃仰の歌を唱和する、まこと  
に花と共に美しく和やかな聖月であります。

今を去る二千五百年の昔、カピラ城の太子として仏陀が  
誕生せられた時、アシダ仙人は、王城におもむいて太子  
を抱き上げ、しげく眺めて、忽ち悲しみの涙にむせび  
ながら

『王よ、この児もし家にゐるまきば転輪王となつて四天下  
を治めたまふであらうが、必ず出家して仏となり、普く人  
々を恵みたまふであらう。それなのに、私は年老いて、こ  
の仏のみ法を聞くことが出来ません』

とまたしても涙にくれました。このアシダ仙人の悲歎  
は、仏の誕生に遭ひながらも、仏の成道の光にふれ得ぬ者  
の悲歎の涙であります。然し私共は、すでに仏滅後二千余  
年の時に生れ、御声も聞けず、慈顔をも拝めず、そのこと  
は悲しみの極みであります。幸に仏語が残り、仏徳は地  
に潤ほひ、天に刻されて居ります。

千三百年昔、聖徳太子は『世間は虚仮なり、唯仏のみこ  
れ真なり』と、光なき世に、唯一無二の仏光を仰がれまし  
た。

七百年昔、親鸞聖人は『煩惱具足の凡夫、火宅無常の世  
界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたわごと、まこ  
とあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはしま  
す』と、はてしなき生死の苦海にあつて、無碍の光明を渴  
仰せられて居ります。

## 仏智の照すところ

我々の生活は、夢中夢をさとらず、狂者狂を知らずと  
同様で、無明の闇に居りながら、光あるかに幻覚し、はて  
しない苦海にありながら、樂しみの宝の島でもあるかに夢  
みてゐるのであります。ところがその全体がお育てにより  
仏智に照らし出されて参るのであります。

この間の消息を知るに、昔書として、俳人一茶の『父の  
終焉日記』を想ひ浮べます。これは十四歳の頃、継母との  
折合が悪く、江戸に出た一茶が、あれこれと辛勞を続け

て、俳人としての名も聞え始めた三十九歳の春、久し振り  
に郷里の柏原に帰りました。ところが父が急病で倒れ、田  
植時のこととて継母も義弟も野良に出て、一茶一人が父を  
看護するのであります。

ところが、父が枕頭にゐる一茶にやさしい言葉をかけた  
りするのが継母の気に入らず、また父が病氣のために与へ  
られてゐる砂糖を一茶に嘗めさせたといつて義弟がつむじ  
を曲げるなど、家の内の暗澹とした空氣が深刻に誌されて  
あります。

ことに病床の父が、生れた土地に帰れ、さうして妻を持  
つて暮せ、田畑は弟と二つに分けてやるからと一茶に云ふ  
ので、一茶も心に誓つて『元の弥太郎になつて鉢を執りま  
せう』と言ふと、父は非常に喜ぶのであります。そのた  
めに家の内は一層荒れに荒れるのであります。

この日記を読みますと、光のない泥沼ののた打ちで一貫  
して居りますが、その巻末の余白に、一茶は二つの説話を  
添へてをります。

『兄弟、親のもとよりおの／＼五百両の金を得て帰る道に  
て、弟、彼の金を棄てけるを、兄、何とてすてけるぞと問  
ひければ、弟、泣く／＼語りける。我、この金を持ちたる  
故に悪心起り、其五百両を奪ひとりて千両となさばやと思  
ふ悪心起りぬ。されば、金のうたてきものなれば、棄つる

なりとなん云ひける。兄、涙を流して、我も汝を殺して、  
その金を奪ひ、千両となさばやと思ひしとて、同じく淵に  
すてにける。世にこれを断金の交りといふ也』

『兄弟二人、親の病氣見舞に來りけるに、一人は道近けれ  
ば早く立ちけれども、暮れたれば前後も見へず、道に塚穴  
ありければ、かがみ居て明けるを待ちける。

然るに、一人は道遠くしてあとから來りけるより、其穴  
に落ちけるに、先に入りたる子は、鬼來りて我を喰はんと  
すらんと防ぎ、あとから來れる子は、穴に鬼ありて我をあ  
やめむかと、互に摺みあひけるに、夜明けて見れば兄弟な  
り、生死の間に迷ひをれば、皆無明の鬼なるべし。』

ここに、始めは一茶一人が善人孝子として独善的に誌さ  
れた愛欲葛藤の日記も、余白に及んでその自分のあさまし  
さ、欲深さと心の暗さが、恰も自分自身に言ひきかせ、説  
ききかせて居る如くに誌されてあります。

無明生死の間に、疑心暗鬼の修羅場を織りなしてゐる、  
その自己の姿を知らないではない一茶ではあります。然  
しそれは空しい言葉で、身にふれて來ないのであります。  
教があつても身につかない状態で終つて居ります。ところが、それから十年も経て

と詠じた頃から、花やかな師匠としての江戸の生活を閉ぢて、柏原の故郷に帰り、仙六との和解も成り、家を持ち、妻を迎へるのが、一茶五十二歳の四月であります。

これがこのつゝの住み家か 雪五尺  
明月の御覽通りの 屑家かな

とも詠じ始めたのであります。そして子が生れると無性によるこび、大びらに歌ふのであります。次から次へと四人までも子が夭折するのであります。最後には石太郎と名をつけて、これなら碎けまいと願ひますが、この子も亦早世するのであります。そこに

苦の娑婆や 花が開けば 開くとて  
春の夜は 春の夜ながら さりながら

と歎じ、その悲歎の底にあつて、

ともかくも あなたまかせの 年の暮

といふ、仏力一つにおまかせした、信の曙光が射しそめてゐるのが発見されます。

が、それは同時に生きとし生ける者の上についても申せることであります。中天に一片の月影のあらはれる時、千種に宿る露の上にその影を宿すのは理の当然であります。月影が池の水にのみ宿つて、小さな草露には宿らないといふことは決してありません、その代表者としてここに一茶をあげました。そして未だ月の出ない時の暗さをアシダ仙人

### 『御文』の発見

いつも見聞して居りながら、平素は何の気なしに打ち過ぎてゐたことが、何かのきつかけで、ハッと驚き、こんな尊い、こんな深いこととは知らなかつたと感じる事がよくあります。『御文』の発見と申しますのも、私自身が常に拝読申して居りました、その真実の生命と申しませうか、不滅の光明と申しませうか、何ともいへぬ尊いものにふと気づかされ、そこに無限の喜びを感じて居り、その次第をありのままに申し上げたいのであります。

この一茶の歩みの跡に、はげしい一茶の業報にそいまひながら、仏心のまことの絶えない慈育を仰ぎ、そありまここに一茶の無明の胸に誕生される仏陀の慈容に触れるのです。

嗚呼然し、その本源を探せば、一茶の父の心に宿る信心の種子が、一茶の心田に咲く信心の華となつたのであります。日記にありますやうに、聖人の御忌には、重病者の父が起きて仏前に勸行し、いよ／＼臨末に『行かう／＼』と浄土に還る、念仏者の住生の相をあらはして、その信の有様を告げて居ります。然し一茶の心は当時なほ熱さず、或は念仏者の頑固さと解し、或は臨末の幻覚と思つて居ります。然し、聞く人の心の如何を問はず、蒔かれたる真実の種子は、必ず時を待つて根を出し枝を延べ花をつけ実を結びます。これ信心の篤い父からの賜物であります。

世間に『うそから出たまこと』と申すのも、こちらの浮調子の心如何にか、はらず仏心のまことの力強さに調伏せしめられて行く姿にもあてはまると思ひます。

仏陀降誕の聖月、真実の力の不滅性と、その建現力を一茶の上に見出して、そのまことの地にうるほへかしと念じつつ、仏恩を謝しまつります。

以上一茶の上に建現した、仏誕生の意義をのべました

の悲しみに見出し、すでに降誕せられ、成道されたあとに生れ出た私共の幸慶をあたらしく省みました。

めぐまれて 生きるいのちの 尊さよ  
名もなき草に ひかりこぼるる  
(読人しらす)

### 花田正夫

#### 『王本願』の発見

さて、数年も前でありましたが、一切衆生の救済を誓はれる王本願たる第十八願文と、その成就文にも『唯、五逆と正法を誹謗せんとをば除かん』と、所謂釈尊の抑止文があります。ふと或日、五逆の罪はもとより私の生涯かけて浮ぶことの出来ぬ泥沼であるが、正法を誹謗する罪も現に身に具してゐる。もとより真正面から仏法をそしるといふことはありませんが、その反

対に、仏法に限る、念仏でなければ駄目だ、親鸞聖人こそ当々と申し立てて、自分では一角仏法の手伝ひをしてゐるかに思つてゐたことが、かへつて、獅子身中の虫であり、誹謗者である、と知らされて以来、五逆、謗法の私の全体が際々と照し出されて、そこに、斯る私の心の隅々までを照覽遊されての上の大悲であり、この私をこそたすけ遂げんと思召し立ち給ふ本願のかたちけなさに涙しつ、王本願の深き思召しに驚きました。

「歎異抄」の発見

又、学生時代から歎異抄、々々々と、肌身離さず今日まで過ぎて来ましたについては、何時の程にか、自分が歎異抄の玄人になつて、歎異抄自体の尊さを忘れて、その尊い書を拜読する自分に値打ちをつけて、何時しか、仏法物を我もの顔に振舞うて、法泥棒に墮してゐる身を教へられ、そこに、泣く泣く筆を止められた唯円大徳の御涙の全体が、この私の上に澱ぎに澱がれる大悲であると仰ぎそめて限りなき 歎異の涙 唯円の  
 ころもしらで 五十路すぎゆく  
 と感佩し、歎異抄の大発見をさせて頂きました。

「御文」の発見

さて『御文』のことではありますが、蓮如上人の御在世の『お前はスツタ、モンダと文句をつけて、御文をしみじみと拝読しないのは、何といふことであるか。百のものは十に、十のものは一に縮められて、かなめかなめを取りよせて、平明に簡易に、信心安心といふ言葉さへも同時に言つて迷はさぬやうにとまで御心労下さつた『御文』が、六難しいとは言へまい。結局は、自分が賢くなつて、愚夫愚婦の仲間でない賢げに振舞ふ姿こそ、そのまんま本當の愚者の姿ではないか！

昔、法然上人は、法師は三つのもどりを切れ、名聞、利養、勝他のもどりを捨てよと叱られ、聖光房が震へ上つたこともあり、又上人の御前に学生たつる人々がまかり出て、さかしく法文沙汰をして帰る人々を見られては、往生いかかと案ぜられ、田舎の人々の一文不知の人々が、御法縁を頂いて、あら尊や、有難や、と念仏申すのを聞かれては、さだめてめでたき往生をせんと仰せられたではないか！  
 「よしあしの文字をも知らぬ人は皆、まことのこころなりけるを、善悪の字しり顔は、大そらごとのかたちなり。是非しらず、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなければども名利に人師このむなり」とは、八十八歳の聖人最後の御筆おさめの金言ではないか！  
 と、声なき声の大叱責をうけて、全身汗びつしよりとぬれて、早朝、床をけつて『御文』の前に端坐せしめられま

頃から、春風秋雨五百年、真宗の信者は『御文』を、如来の直説と抑ぎ、如来の金言と尊んで、凡夫往生の鏡として、朝夕に拝読し続けて来たのであります。ところが私自身は岡山県の片田舎の真言宗の家に生れ、説教があるといふことさへも知らず、法縁も薄い村に成長したので、『御文』も知りませんでした。ただ歎異抄を中心に導かれて居りました。後に聖典も拝読申し、勤行などもし、僧侶にもなりましたけれど『御文』に対し、何か親しみ難いものがありました。何処か親鸞聖人とは風格の違つたところがあり、繰り返して拝読しても、所謂、絞切型な御教化で、何だかお粥の二度炊き、三度炊きといふ感じがして、ひたひたと心の通はないもどかしさがあり、そこを淋しく思つて居りました。

それに所謂近代的文化人と呼ばれる人々で、真宗に可成深い理解もあるらしい人々がなほ、親鸞聖人については瀟腔の讃仰をしながら、蓮如上人には種々な批判、甚しい非難も大びらに発表するのを聞いて、そこに私自身も文化人に加へて貰ひたいばかりに、蓮如上人のことはソツトしておくといふ対度で居りました。  
 ところが、これもふとしたことから、私自身が、愚鈍の身であるといふことが深く感ぜられて、この末代無智の凡愚を忘れて、一角の知識人、文化人と自認してゐたことの無恥さを知らされ

した。このことが、恥づかしながら痴鈍な私の、おそまきながらの『御文』の発見となりました。

昔から、猫に小判とも、宝の持ち腐れとも申しますが、私がそれで『御文』の宝珠を頂きながら、それをそれと気付き得ないで、御粗末にあしらつて参りました。

世間道徳では知らぬ罪は軽いと申しますが、信の上からは、知つた罪よりも、知らぬ罪がなほ恐しいのであります。何故ならば、知つてさへ居れば、何時かは改めることでもあります、気付かぬ罪、知らぬ罪程、おそろしいものはありません。

それにいたしましても、常照不断の慈育を蒙つて、凡夫往生の鏡、如来の金言、直説として『御文』を発見させて頂き得ましたことは、私の近來のよろこびであり、また生涯のよろこびであります。

瞑目一番、愚案をめぐらしますのに、勝鬘經に『如来に調伏せられて如来に帰依し、法の津沢を得て信樂の心を生じ、法と僧に帰依す云々』とありますが、私共が如来に帰依するのは、如来からの調伏を蒙つて始めて頭が下がる、そこへ善友・知識の法話やら信仰書にうるほはされて信樂

の心がおこるのであります。「御文」への私の開眼は、全くこれと同様であります。私自身は、何が真だやら、何が仮だやら、何が偽だやら、さつぱり見分けのつかない盲人であります。その私が「御文」の活文字に驚歎、随喜し奉るといふことは、全く仏力であります。「御文」そのものにそなはる真実な力の催しによる外はありません。

『ひとへに他力にして、自力をはなる』と歎異鈔にも申されますが、絶対の真実は、太陽が自らの放つ光明の力で自らをあらはす如くに、人の心に徹して参るのであります。もしその力に何か他の力が雜じらねばならぬのであれば、それは相対的真実で、底のあり、限りのありやがて消えて行き、崩れ去るものであります。

私自身は、其時、其時の気まぐれな心で「御文」を拝読して居るのでありますが、うそから出たまことでも申しませうか、こちらの心の状態の如何にかかはらず、目から耳から注入された真実の種子は、宿善の催しにあづかつて根を下し、枝を出し、花をさかせ、実を結ぶのであります。然も、同じ樹になつた柿の実も、日光のよくあたる柿は早く熟する如くに、朝夕に金言、実語を、耳から目から心にとどける、油断なく仏法を求めるところ、そこに宿善が熟し来つて「御文」の力で「御文」の尊さを知らされる

のであります。

『繪像はかけ破れ、聖教は読み破れ』

と対句にして門徒に常に訓へられた蓮如上人は、教行信証、六要鈔、安心決定鈔、等々、何度か読み破られた上に、あらゆる滋養物を母乳に転じて嬰兒に与へる母の働きを、難波なお生活の中にも成就して下されたのであります。「御文はその母であります」

『いたりて堅きは石なり、いたりてやはらかなるは水なり、水よく石を穿つ「心源もし徹しなば菩提の覚道何事か成ぜざらん」といへる古き詞あり。いかに不信なりとも聽聞を心に入れ申さば、御慈悲にて候間、信を獲べきなり。只仏法は聽聞に極まることなりと云云』

と哀々切々として悲引し勸化して下さる思召しも、自力のはからひの総て無効なるを見定められて、絶えざる他の力のひとり働きの故に「よく聴け、よく聞け」と、夜の寝ざめにも申されたことでありました。その思召しが「御文」として現に朝夕拝読申すまでに徹して下さつてゐるのであります。

## 近角常觀先生の御一生を追憶して

福 島 政 雄

### 三、信仰・求道・御示寂(一)

### 政治と宗教

近角先生が西洋からお帰りになつた明治三十五年は、先生は数へ年三十三歳の御時でありました。それから四十ヶ年間は先生の信仰上大活動をなされた時代であります。此の間の御活動を一々年月をしらべて述べることはむづかしいこととありますから、今は此の間における御活躍の最も注目すべき点を述べることに致します。

### 親心の感激

明治三十五年三月二十四日に先生は長崎の港に御帰着になりまして、その旨を御両親に電報でお知らせになりました。「故郷では父が母と電報をとり合ひをして諸根悦子で、身体中が嬉しいと言はれた。夫を聞いて我身ながら其不孝を自覚した」と先生は後に述べておいでになります。が、御親子の御胸中、何とも言はれぬ尊くありがたいことを感ぜられるのであります。

本山から急に先生を呼び返されたことには仔細があつたのであります。当時僧侶も代議士になることを許されたので、本山では先生をその候補にあげられたのであります。

然るに先生は前にも述べました通り西洋の宗教を御視察中に、宗教が政治と結託して政治を利用することは宗教としての墮落であると感じられ、殊にカトリック教会の動きについて深刻にその弊を痛感せられたのでありますから、断然代議士候補を御辞退になり、唯一筋に信仰を説く生活を御始めになりました。明治三十五年六月一日に求道学舎が創立せられたのもその為めでありました。先生が辞退せられたのでその代りに出られたのが安藤正純氏であります。

抑々先生は政治といふ方面から見たならば如何なる御方であつたかと言へば、政治的天分を御持ちになつて、政治

的眼光の最も鋭い御方であつたと思はれます。その先生が政治界に出ることを辞退なされて、一筋に信仰を説かれるやうになつたといふことは、明治、大正、昭和の仏教の信仰界のために実に慶賀すべきことであつたのであります。政治界に及ぼさるべき十分の力が転じて信仰界に向けられたのでありますから、それは信仰界における偉大なる力として發揮せられたのであります。

### 仏教のあり方

当時先生は教国主義や政教主義が共に不可であるといふことを論及せられました。宗教家が政治を利用することも誤りであると共に、政治家が宗教を利用することも誤りであるといふ旨を痛感しておいでになり、これは先生の御一生を貫いた持論でありました。英国の国教主義をも不可とし、カトリックが政治的に發展していることは最も誤れるものであるといふ御考であります。それ故日本の国家が仏教を国教とすることに勿論反対せられます。日本の国は信教の自由の下に、ただ何となく仏教の国であるといふやうなのが宜しいと言つておいでになりました。それでローマ法王と我國と使節の交換することには絶対反対の御意見でありました、カトリック教には国土の野心のあることを觀破しておられたのであります。それで使節交換問題が實際化しようとした時には死力を尽してそれを阻止せられたので、そこに久遠の仏陀の御まことが貫かれてあつたのであります。

### 求道学舎

求道学舎の『求道』といふ名は大無量寿経から出たのでありまして『たとへば大海の如きも、一人升量して劫数を経歴せば、尙底を窺めて、其の妙宝を得べし。人至心有りて精進に道を求めて止まずんば、かならず当に尙果すべし、何の願か得ざらん』といふところからつけられた名であります。此の経文の通りに、先生は非常な決心と熱を以て親鸞聖人の御教を御説きになりました。

求道学舎は東京本郷森川町にありまして、最初は粗末な木造の寄宿舎でありました。その二室ほどを打ちぬいて、先生は毎日曜日の午前に熱心な御法話を御つづけになりました。また九段の仏教倶楽部にも土曜日に御出かけになつて御講話がありました。

求道学舎は寄宿舎として、主として帝国大学の学生を入れて、信仰上の御導きをなされました。帝大と向きあふ位置にあつて帝大と張合つてやるのであると仰せられてゐました。併したた帝大と張合つて御活動なされたものではありません。日本全国を相手として御活動になつたのでありまして、全国に遊説なされたのであります。それも純粹の信仰上の御講話でありました。

### 「求道」誌と会館

のであります。

### 勅使のおたとへ

求道学舎を中心とする先生の世界は政治を超越した世界でありました。しかも日本国の生命の潤ひとなるといふことは、先生の衷心の御念願でありました。先生の御講話の中には始終勅使御差遣の御たとへが出ました。たとへば風水雪や地震のために窮乏のどん底におち入つてゐる人民がある時に、陛下は御慰問の勅使を御遣はしになる。普通の時であるならば、勅使をお迎へするのに礼儀を尽さねばならぬが、今は災害に逢つて、礼服はおろか、きちんとした服装で勅使をお迎へすることも出来ない。併し陛下の大御心では人民がそのやうなやぶれかぶれの有様になつてゐるのをしんからあはれに思召して、御慰問の勅使を下され、且つ御救恤のお金をさへ賜はるのであるから、人民としてはその大御心を身にうけて、有りのままで有り難く勅使をお迎へするより外はない。仏陀の御慈悲もその通りである。罪業深重、煩惱熾盛のどん底に沈んでゐる我々衆生の有様を徹底的に御見とほしになつて、それをあはれと思召し、あくまでも見棄てない御慈悲を我が身に受けて、我々はその御見すてない御慈悲を我が身に受けて、そのまま有り難くお念仏申すのであると先生はよく御説き下されました。この先生の御信仰の中には日本国の生命が躍如とし

明治の終り方から大正年間にかけて、先生の感化を受けた青年は数多くありました。それ等の青年は先生によつて信仰の眼を開かれ、それぞれの方面で活躍するやうになりました。

併し東都の青年ばかりではありません。明治三十七年二月一日から、先生は『求道』といふ雑誌を發刊せられ、全国に呼びかけられてゐましたので、有力な実業家などで先生に傾倒する人々が次第に多くなりました。その人々の力で大正四年十一月三十日に求道学舎が出来、大正十五年四月に学舎は改築せられて現在の求道学舎が建立せられました。此の学舎と会館とを中心として先生の感化はいよ／＼と広く及ぶやうになつたのであります。

### 生きた聖教

先生の御法話の中心は大無量寿経、教行信証、數異抄にありました。御法話はそれらの御聖教にひたりきつてお話をなされますので、聴く人は先生の上に釈尊や親鸞聖人をひた／＼と感ずるのであります。また聖徳太子も先生の上に生きておいでになりました。親鸞聖人の信仰に心の眼が開けたならば、その次には聖徳太子の十七憲法が大切な問題となると先生は言はれました。そこに信仰と日本国家の生命とが一流れになつてゐる先生の御心がはつきりとわかるのであります。

未完

# ひとへに往生極樂の道

榊原徳草

聖人は歎異鈔第二章において「各々十余ヶ国の境をこえて云々」と、遙々關東より幾山河を旅してやつてきた同行達に向つて語り出されるが、そこで聖人は「ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり」と、と問ふ者に対して、その問ひの要の<sup>かなひ</sup>ところを指し示し明らかにして下さつてゐる。

これは七百年の昔に聖人とその御弟子達との間におこつたことであるが、現在の私達によそごとであるのか、過ぎ去つた古い昔の物語りとして片付けておいてよいのであらうか。私はころころ「ひとへに往生極樂の道」といふ聖人の御言葉に、何かしらのちを新にするものを感じるのである。一口に云つてしまへば「往生極樂の道」と聞く私には、生きる方向がついてくるやうに感ずるのである。西方に淨土を建立されて、その西方淨土に往生させて頂くその

新しいものとして一つもない、浪速のあしは伊勢のは、まおきで、もう毎日同じことばかりである。それらが形を替へたり、名を代へたり、順番をかへたりして出てくるだけで、中味は少しも交らず、只々石臼の廻りを廻る蟻の歩みは忙しく駆けめぐり果てしない同じ輪廻の苦、煩惱の林に分け入る外に私の生命の生き方はないのである。輪廻といふこと、迷ひといふこと、そんなことが身にしみて思はれてくるにつけて、その迷ひの私に、方所を定めて道をつけて下さる、ひとへに往生極樂の道といふ、この道のあることが、どんなに有難いことであるか、恰も荒野に迷ひ込んだ者の前に忽然と見出された一条の道のやうである。

「ひとへに往生極樂の道を問ひきかんがためなり」との聖人の仰せは、關東の同行達の彼れもお訊ねしよう此れもお伺ひしよう、聖人とお別れしてから乱れに乱れた心のもつれのもと綱を握られて、これがその根元なのだ、恰も濁る川水の源につれて行かれた趣である。

私の所には犬が飼つてあるが、犬と遊ぶときその鼻元へ手の指を出して色々の恰好をしてみせると、犬はその指先だけに全力を集中して噛みに来たり躍りかゝつてきたりする、その真剣な顔色や態度や口惜しさの表情などが可愛いので皆してさうさせるために時々やつては大笑ひするので

道を聞く、それが人生の目的である、私の生きる毎日ほそれなのである、と聖人から改めて「ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり」と毎日々々の私に言ひきかされる思ひがするのである。

日々の生活を形作つてゐるものは、輪廻の一語につき。事は交れどその実、内に包んだ煩惱の中味は、千変一律、ちよつとも交りがない、昨日も今日も明日も、同じ所をぐるぐるまひしてゐるに等しい。子供の時分にどこで聞いたのか忘れてしまつたが、御法話の折に、たぶん母の膝にもたれて小耳にはさんだ御法話の一節「ちようど石臼の廻りを蟻がはひまはるやうに、六道を輪廻して尽くる時がない……」と言はれたお話の「石臼の廻りをはひ廻る蟻」の一句が、この頃つくづくわがことであると胸によみがへつてくるのである。

あるが、私がこの犬と同じだと思ふことがある。毎日起る枝葉末節のことに取巻かれて疲れ切つてしまふ。指先の千変萬化に困りぬいて疲れたり抵抗したりして全身心をもて余してゐる。けれどもその指先の變化の根元の在所を見ることができな、見る明がない。この見る明もうち克つ力もない者に、明と力との道をつけて下さるのが、只念仏の一道であり「大道長安に通ず」といふ言葉があるが、この長安の都に通ずる道は私の足下の今踏んでゐる此処から通じてゐなくてはどうにもしようがない私達である。又たとへ道は足下に都へと通じてゐても、曲りくねつた細道では、ふみだす勢も出てこない。

しかるに、ひとへに往生極樂の道、即ち「たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべし」との、よき人の仰せに聞きとるこの念仏の一道は無碍の大道であり又あしもとからの直道であつて、煩惱具足の毎日々々に歩み悩める私の足下に通じ身心に通ずる大道である。

關東の同行達が、曾て聖人の膝下に承つた身の温まる念仏一つの道も、聖人にお別れして年月を重ねてくると、法門の異義に心乱れて、行く手をさえぎる雲霧に、いのちの指針を失うたかと感ひ、いかにして今日一日を送ることかと迷ひの闇に沈んでしまふ。

そこで「身命をかへりみず」聖人の在す京洛の地へ、遙

々と千里の道を遠しとせずして上洛の決心を固めた人々、長途の旅を終つて聖人を目前に拜し感慨無量の同行達、聖人の御姿に聖人の御口元に吸ひつけられるやうに身を以て拜してゐる面々の前に、聖人の御口から「各々十余ヶ国の境をこえて、身命をかへりみずして尋ねきたらしめたまふ御ことろさし、ひとへに往生極樂の道を開ひきかんがためなり」の一語を聞かれた同行達は、どう感じどう心に味つたであらうか、どう身に響いたことであらうか。

七百年の星霜も古しとは云へぬ、千万年の歲月もどうして長いと云ひ得よう。なぜならこの惑ひこの輪廻の苦は、いつの世、いつの日にあつても、人の子の地上に在らん限り、影と形のやうに永恒まといひつきて離れぬのが我等のまことの姿だからである。

私には関東の同行達の惑ひの姿が、今日のことと思へてならぬ。ひとのことと思へないのだ、私の日常は、惑ひの因縁、ことの起りは交つてゐても、惑ひと苦と闇との煩惱の苦悶と同じもので埋つてゐる。だから聖人の御言葉が懐しくてならない、有難くてならない。——徳草さん、ひとへに往生極樂の道を開ひ聞かんがためですよ、との聖人の音声に接するのである。

惑ひと迷ひにかけては、誰にも引けはとらない私に、ひが滲み込むやうにだん／＼と味へてくることである。

ひとにあつたといふこと、よき人に遇ひまつたといふこと、萬却にも遭ひ難い好き人の仰せをかうむつて信ずる外に別の仔細がなくならして頂き、いよ／＼お念仏が、あちらの方から身にしみて下さること、まことに謝しつくせぬよろこびである。

お文の中に蓮如上人の御言葉の一つに「阿弥陀如来は深くこれをよろこびまし／＼てその御身より八万四千の光明を放ちて云々」といふ一節があるが、「阿弥陀如来はこれを深くよろこびまし／＼て」とは、まことに有難いお言葉であると此の頃感じたことである。こんなに実感のこもつた御言葉はさうどこにもあるのではない、光顔巍々として威神極りないところ。釈尊の御前に、布有なり世尊と驚きの眼をみはつた阿難のやうに、吾々も蓮如上人のこのお言葉には驚きの眼を放つ外はないのであるが、同時によくよく案じ、よく／＼御本願のいはれを承つて日常の苦難の生活をかへり見、生々流転のおのが身を知らせていたゞくと、それらがいろ／＼のいきさつを經過して、お念仏一つの道におさまつて行く、そのお念仏一つにおさまりがついで何のようもなくたゞそれだけで如来様の御心が身にしみてくるさきさき、「阿弥陀如来は深くこれを喜びましまして」下さる金色のお姿に面接さ／＼れておどろくのである、懐しいのである。親様の御心にあはせて頂くことでありま

とへに往生極樂の道、念仏の大道を、南無阿弥陀仏一つを、恰も頼朝から頂いた銀の猫の引出物を、門を出るなりそこに遊ぶ小童に、なんのおしげもなく与へて下さる西行法師のやうに、法然上人の面前で面投口訣された往生極樂の道、南無阿弥陀仏の銀の猫を、吾等路傍に無明の酒に酔ひしれて遊ぶ悪童に、おしげもなく、否、やりたくてたまらなくてさし出し給ふ聖人のお心が、そのまゝ私の今日をして輪廻の昔から開放され、光さす明日の約束となるのである。

「貪愛瞋憎の雲霧は常に眞実信心の天に覆うてゐるが雲霧の下は明かて闇なきがごとし」と聖人は正信偈に仰せになる、まことにいつまでたつても、どこにゐても、臨終一念の夕までは一向に迷妄の凡夫であり、あれこれに悩みや不足の絶えない私達であるが、即ち、ひとへに迷ふことしか知らぬこの私のためにこそ、それに即して、ひとへに、往生極樂の道、南無阿弥陀仏を与へ、光を与へ、生き甲斐を感じしめ、いよ／＼大悲の親様の懐しまれてならない、これたゞ一つの御六字さまのひとりばたらきのおかげであります。

ひとへに往生極樂の道とは、ひとへに私一人への往生極樂の道であつて、だれのためのものでもない、といふ実感、自分の今日までの短い人生だけにかけても、海綿に水

す。  
親さまが「これを深くよろこび」下さることは、同時に「これを深く悲しみ」下さることの裏である、だから内に外にきのふにけふに常に一寸も離れず阿弥陀如来は一つになつてゐて下さるのが、南無阿弥陀仏一つに納まつてしまふと、かたじけない感情の中からおよろこびの親様が拜されてくるのである。

ひとへに往生極樂の道を南無阿弥陀仏の一つに封じこめてお渡し下さつた聖人のお顔は、これを深く喜びましまして御身より八万四千の光明を放ちて攝めとつて下さる如来聖人、阿弥陀如来の表現があらせられる。聖人と拜すれば阿弥陀如来、阿弥陀如来さまと拜すればよき人聖人が現れてくる。

孔子大聖も、師を持たぬ人は愁しいと言はれる。吾等師と呼ぶには余りにも親しき「よき人」を持ち、その仰せに「往生極樂の道」を、たゞ念仏一つに聞かせて頂くこと何とありがたいことでありませうか。

今日の道は、そのまゝ往生淨土の道であつて、少しも変らない。それは私の道でありながら、ひたすらにあなたさまから与へて下さるお念仏の道だからであります。

(三一、二、一〇〇)



編集後記

春、乾坤にめぐり来り、若芽と花に埋れて、野も山もよろこびにあふれて居ります。花祭りの行事は、世界を通じて夫々に応じて催されて居ります。

この仏降誕のよろこびが、私共の内  
に生きたひかりとして仰ぎたいものであります。最近不思議な御縁から、中村久子女史と御信交を頂きました。両手なく、両足のない、まことに御不由の御身であります。

手はなくも足はなくともみ仏の

袖にくるまる身はやすきかな

と歌はれて居ります。そして、病者や不具者や、不幸に沈む方々に、無限の慈光を、心から心に移して居られます。そこに真実のよろこびが見出され、仏降誕の意義が現に照りかがやいて。渴仰せられます。

△「近角先生の御一生を追憶して」の福島先生の御原稿は、次回で完了させて頂きませんが、今回は「仏教と政治」

と「仏教の在り方」について、現在の仏徒の動きにおいて、ふかく反省させられる問題であります。暗夜に北斗の七星がその不動の位置と方向を示すが如く、この指針を頂きたいものであります。福島先生の御住所、東京都調布市仙川町七九四番地であります。

△「ひとへに往生極楽の道」は柳原徳草様から久し振りに頂きました。京洛、苔寺の近くの名刹、浄住寺に住せられながら、高槻市の医科大学の事務長として長く勤務せられて居ります。その忙しい中に、肌身離さず歎異鈔を身読されての法味であります。御住所京都市右京区山田開町浄住寺であり、京都駅から苔寺行きのバスも通つて居ります。日曜などの御在寺の日に皆様の御訪問せられるやう御照会申しませす。白井成允先生も二三町離れた地に新居を定められました。

△「仏降誕の意義」は四月八日の聖日にちなみしました。

「御文の発見」は、私の心にひらけた近來のよろこびの一つを述べました。御判読願ひます。

御案内

△毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、一道会館日曜講話

市電、新郊通一丁目下車、東へ三丁。名鉄、呼続駅下車、約二十分徒歩。

△毎月十三日、熱田区幡野町、願入寺、午  
前午後、法話会

△毎月廿四日、昭和区小椋町、教西寺、午  
前午後、法話会

△四月廿二日、岡崎市東別院同朋会館、午  
前、歎異鈔講話

定価 一部 十七四 (送共)

半年 百四 (送共)

一年 二百四 (送共)

名古屋市南区匠上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 奥川 正生

名古屋市南区匠上町二ノ二八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番